

成人看護学実習における健康増進センター実習の学び（第1報）

～ 実習記録内容の分析より ～

横田 修二¹⁾ 甲賀 純子²⁾ 宮堀 真澄³⁾

Learning of Health -Promotion- Center training program in adult nursing clinical training (The first report)

～ Than analysis of training record contents ～

Shuji YOKOTA Junko KOUGA Masumi MIYAHORI

要旨

成人看護学実習における健康増進センター実習は、生活習慣病の予防と健康教育の理解を目標に実習を展開し2年目を迎える。そこで今回、学生がどのように健康教育を理解し、学びを得ることができたのか把握することを目的に、実習記録内容の分析を行った。その結果、以下のことが明らかになった。学生は、「対象の特徴」「看護師の役割」「健康教育の意義や方法」が理解できており、受診者の健康意識への働きかけや生活背景を意識した関わりの重要性を学んでいる。しかし、記録内容は対象に応じた健康教育の考察までには至っていない状況であった。

今後の課題として、健康増進センター実習の取り組みに対する意識付けや記録用紙の設定内容の変更などを含めた実習方法の検討の必要性が示唆された。

キーワード：成人看護学実習、健康増進センター実習、実習記録、学び

Summary : We developed training for a Health -Promotion- Center training program in adult nursing clinical training in the second year to aim at understanding prevention of lifestyle-related diseases and understanding health education. Then, also to evaluate the student's understanding of sanitary procedures education, we analyzed the contents of practice records and as a result, the following became clear. "Characteristic of object", "role of a nurse" and "significance and the method of health education" could be understood by students and they learned the importance of the relationship between conscious pressure to health consciousness and the life background of the tested. However, the record contents were not reached by consideration of the health education. The necessity of examination of the training method was able to include a consciousness charge account for an action of Health -Promotion- Center, training program or a change of setting as a future problem was also suggested.

Key Words : adult nursing clinical training program, Health -Promotion- Center, training record, learning ability.

看護学科 1) 助手 2) 助手 3) 教授

本研究は、第7回日本赤十字看護学会学術集会において発表したものに一部修正・加筆したものである。

I. はじめに

ヘルスプロモーションは「人々が自らの健康をコントロールし、改善することができるようにするプロセスである」と定義（1984年オタワ憲章）され、プライマリ・ヘルスケアとともにWHOの健康獲得のための方略となっている。わが国においても個人の生涯にわたる健康とウェルネス（個人の最高の健康状態）の維持・強化を目的に健康教育の推進や環境を整えるための健康づくり対策が実行されている。2000年からは21世紀の国民健康づくり運動（健康日本21）が、高度な生活の質を維持するため一次予防を重要視し、壮年死亡の減少と健康寿命の延伸を理念とし実施されている。

A短期大学では、成人看護学実習の中で様々な健康レベルにある対象を理解するための一つとして、健康増進センターでの実習を取り入れ、生活習慣病の予防と健康教育の理解を目標に一次・二次予防の実践について学んでいる。健康増進センター実習で学生は、看護師と受診者の関わりの実際を見学し、対象の健康に対する意識や看護師の対象の行動変容を促す関わり方に触れる。それは成人期にある人々の「対象の理解」や「看護の役割の理解」に重要な意味を持つ。また、看護学教育において育成が求められている看護実践能力の「健康の保持増進と健康障害の予防に向けた支援」能力形成にもつながる。先行研究において、慢性疾患を持つ人を対象とした透析センター実習での学びについての検討は見受けられるが、一次予防・健康教育に関する学生の理解について研究したものは少ない。また、A短期大学において健康増進センター実習が取り入れられ2年が経過した。今回、実習の評価と今後の課題の示唆を得るために、健康増進センター実習における学生の実習記録内容から学びを明らかにするための分析を行ったので報告する。

II. 研究目的

学生の実習記録内容の分析から健康増進センター実習における学びを明らかにする。

III. 研究の方法

1. 研究対象

2005年度、A短期大学看護学科3年次生77名のうち、研究に同意が得られた学生69名（89%）の健康増進センターでの実習記録内容を分析対象とした。

2. 研究期間

2005年12月19日～2006年1月30日

3. 分析方法

実習記録様式は「対象の特徴と検診の内容」「看護の役割」「健康教育についてのまとめ」の設定項目に対する自由記述である。「対象の特徴と検診の内容」の項目については、事実の記載内容であるため分析対象外とした。「看護の役割」「健康教育についてのまとめ」の2項目について記述された内容を単一要素であるようにセンテンスを区切り、それを1件とした。これを意味内容が類似すると判断したものをカテゴリー化し命名した。同一学生による同一センテンスの複数回答は1件とした。設定項目ごとの自由記述内容のセンテンス件数およびそれらをカテゴリー化したものを単純集計した。分析については研究者間で検討し、信頼性の確保に努めた。

4. 用語の定義

本研究で用いる「学び」とは、健康増進センターでの実習やカンファレンスを通して学生が捉え実習記録の記入によって整理された学生の認識とする。

5. 倫理的配慮

2005年度成人看護学実習終了後、研究目的と方法について口頭および文章で以下の内容を学生に説明し、同意の得られた学生を対象とした。1) 研究への同意・不同意は自由意思であること。2) 研究への同意・不同意は実習評価には一切関係がなく、不利益は生じないこと。3) 記録の使用に際し、プライバシーは厳重に保護されること。4) 記録は研究以外には使用しないこと。5) 研究結果や途中経過については、いつでも確認・問い合わせができること。6) 研究への同意撤回はいつでもできること。

IV. 健康増進センター実習の概要（表1・図1）

A短期大学看護学科における健康増進センター実習の概要と実習記録用紙をそれぞれ表1・図1に示す。

表1 健康増進センター実習の概要

成人看護学実習の目的	成人期にある人々を総合的に理解し、対象に応じた看護を実践できる能力を養う
成人看護学実習の目標	1)成人期にある人々の特徴を理解できる
	2)成人期にある人々を支える家族について理解できる
	3)成人期にある人々が、健康な生活を維持、増進するために必要な看護の役割について理解できる
	4)成人期にある人々の健康障害時の状況に応じた看護を展開できる
健康増進センター実習目標	生活習慣病の予防と健康教育を理解できる
健康増進センター実習の位置づけ	成人看護学実習の目的を達成するために、病棟実習7週と「救命救急実習(救急外来・ICU)」「腎センター実習」「健康増進センター実習」を各1日行っている。
実習時期	成人看護学実習の最終クール前後1週間に設定
実習時間	8:30~15:30
1グループの学生数	5~6人
実習方法	1)事前学内オリエンテーションの実施
	(1)実習指導教員による実習の位置付けと意義の説明
	(2)実習指導者による健康増進センターの概要の説明
	(3)記録用紙の説明
	2)実習は、午前中は1~2名に分かれ「日帰りドック」「宿泊ドック」「乳房検診」「婦人科検診」「乳房・婦人科検診については各検診終了後「日帰りドック」を見学)の各担当看護師に付き、見学を中心とした実習を行う。
	3)午後カンファレンスを実施し、学びを共有する。
	4)記録用紙の提出(A3サイズ) 図1参照
	記録用紙の設定項目
	(1)対象の特徴と検診の内容
	(2)看護の役割
(3)健康教育についてのまとめ	

実 日() 学 時	氏 名	健康増進センター実習
本日の目標		
対象の特徴と検診の内容		
看護の役割		
指導者の助言		
指導者名		
氏 名		

図1 2005年度健康増進センター実習記録

V. 実習施設の概要 (表2)

実習施設であるA病院・健康増進センターの概要を表2に示す。

表2 実習施設の概要

実習施設	成人看護学実習を依頼しているA病院の健康増進センター
業務内容	健診コース: 宿泊(入院ドック)コース:受診者数11名/日・年間総数約2000名 日帰り(外来・1日ドック)コース:40~50名/日・年間総数約9000名
	オプション検査・健康診断・予防接種・ツベルクリン反応・健康相談など
体制	看護師10名/日(宿泊コース:4名・日帰りコース:6名)

VI. 結果

1. 「看護の役割について」(表3)

看護の役割について記述されたセンテンス数は831件であり、11のカテゴリーが形成された。最も多かった記述は【健康診断時の援助】で235件(28.3%)、次いで【健康増進センターにおける看護の役割】126件(15.2%)、【体制について】121件(14.6%)、【健康教育

表3 「看護の役割」として学んだ内容分析結果

番号	カテゴリー	サブカテゴリー	n=831
1	健康診断時の援助	①精神面への配慮	131(15.8%)
		②対象のアセスメント	58(7.0%)
		③セルフケアへの支援	46(5.5%)
		小計	235(28.3%)
2	健康増進センターにおける看護の役割	①安全と満足の保障	64(7.7%)
		②対象の健康への働きかけ	62(7.5%)
		小計	126(15.2%)
3	体制について	①検診の介助	48(5.8%)
		②他職種間の連携	37(4.5%)
		③業務内容	36(4.3%)
		小計	121(14.6%)
4	健康教育における指導技術	①意識への働きかけ	84(10.1%)
		②行動変容への支援	35(4.2%)
		小計	119(14.3%)
5	健康診断の理解	①健康診断の実際	54(6.5%)
		②健康診断の対象	13(1.6%)
		小計	67(8.1%)
6	学生の感想	①学生が見聞したこと	17(2.0%)
		②今回の実習で感じたこと・学んだこと	16(1.9%)
		③今までの実習で学んだこと	15(1.8%)
		小計	48(5.7%)
7	対象の特徴	①心理的特徴	26(3.1%)
		②ライフステージから見た特徴	11(1.3%)
		③患者との違い	7(0.8%)
		小計	44(5.2%)
8	健康診断時の看護師の能力・技術	①求められる知識	18(2.2%)
		②求められる技術	18(2.2%)
		小計	36(4.4%)
9	健康増進センターの目的の理解	①健康の保持・増進	9(1.1%)
		②早期発見・疾病予防	9(1.1%)
		小計	18(2.2%)
10	看護の定義		15(1.8%)
11	受診者の役割	①自ら考え決定すること	10(1.1%)
		②努力の継続	10(1.1%)
		小計	20(2.2%)

における指導技術】119件(14.3%)、【健康診断の理解】67件(8.1%)、【学生の感想】48件(5.7%)、【対象の特徴】44件(5.2%)、【健康診断時の看護師の能力・技術】36件(4.4%)、【健康増進センターの目的の理解】18件(2.2%)、【看護の定義】15件(1.8%)、【受診者の役割】2件(0.2%)であった。

カテゴリー毎のサブカテゴリーと具体的内容は下記の通りである。

【健康診断時の援助】では、『精神面への配慮』『対象のアセスメント』『セルフケアへの支援』の3つに分類された。『精神面への配慮』では、「羞恥心・プライバシーを保護する」「不安への対応を行う」などであった。『対象のアセスメント』では、「受診できるかの体調の確認が必要」「検査前後や指導前後の変化を見ておく必要がある」などであった。『セルフケアへの支援』では、「健康維持増進の取り組みは褒め、今後も続けていくような関わりをしている」「根拠のある情報提供を行う」などであった。

【健康増進センターにおける看護の役割】では、『安全と満足の保障』と『対象の健康への働きかけ』に分類された。『安全と満足の保障』では、「安心・安全に受診でき、満

足が得られるサービスを提供すること」などであった。『対象の健康への働きかけ』では、「健康の保持・増進、疾病の予防に向けた看護を担う」「健康意識を喚起する」などであった。

【体制について】は、『検診の介助』『他職種間の連携』『業務内容』に分類された。『検診の介助』では、「医師の介助を行う」「検診の準備も大切」などであった。『他職種間の連携』では、「他部門と連携していかなければならない」「橋渡しの役割を担う」などであった。『業務内容』では、「前日に受診者の情報収集を行う」「看護師は前日から直前まで準備を行う」などであった。

【健康教育における指導技術】は、教育場面での役割について述べ、『意識への働きかけ』『行動変容への支援』に分類された。『意識への働きかけ』では、「自己効力感が高まるよう関わる」「生活習慣を改善する動機付けが行われている」などであった。『行動変容への支援』では、「生活背景を捉え個性を重視した生活指導を行う」「生活改善に向けて共に方法を考え、受診者の納得が得られるような関わりをする」などであった。

【健康診断の理解】は、『健康診断の実際』と『健康診断の対象』に分類された。『健康診断の実際』では、「関わりは短期間で終了となる」「センターでは多くの検査が行われている」などであった。『健康診断の対象』では、「主な対象は健康な方である」「受診者の中には健康な方もいれば、疾患を持った方もいる」などであった。

【学生の感想】では、『学生が見聞したこと』『今回の実習で感じたこと・学んだこと』『今までの実習で学んだこと』に分類された。『学生が見聞したこと』では、「入院ドックで様々な項目を見学できた」「問診は時間をかけ一人ひとり丁寧に言う」などであった。『今回の実習で感じたこと・学んだこと』では、「短い時間の中で信頼関係を形成するのは難しい」「短時間での情報収集は難しい」などであった。『今までの実習で学んだこと』では、「病棟での看護は、身体的援助が中心である」「病棟看護の役割は、退院を見越して援助を行うことである」などであった。

【対象の特徴】は、『心理的特徴』『ライフ

ステージから見た特徴』『患者との違い』の3つに分類できた。『心理的特徴』では、「結果への不安を抱きやすい」「受診への不安や苦痛を抱いている」などであった。『ライフステージから見た特徴』では、「受診者は様々な年代や職種でありそれぞれの生活スタイル、生活背景を持つ」「受診者の生活スタイルも一人ひとり異なる」などであった。『患者との違い』では、「病棟と大きく異なる部分は、患者ではなく受診者が対象となること」などであった。

【健康診断時の看護師の能力・技術】は、『求められる知識』と『求められる技術』に分類された。『求められる知識』では、「的確な判断・対応のために多くの知識が必要」「指導のためには多くの知識が必要」。『求められる技術』では「大切なのは雰囲気作りである」「対象に合わせたコミュニケーション技術が必要」などの記述内容であった。

【健康増進センターの目的的理解】では、『健康の保持・増進』『早期発見・疾病予防』に分類された。『健康の保持・増進』では、「センターの目的は健康の保持・増進である」。『早期発見・疾病予防』では、「センターの目的は、一次・二次予防である」「一次予防のため生活指導を行う」などであった。

【看護の定義】は、ICNや倫理綱領の看護の定義を自己の考察の根拠として使用している。

【受診者の役割】では、『自ら考え決定すること』と『努力の継続』に分類された。

2. 「健康教育について」(表4)

健康教育について記述されたセンテンス数は1203件であり、9のカテゴリーが形成された。最も多かった記述は【健康教育における看護師の役割】で562件(46.8%)、次いで【健康教育の理解】213件(17.7%)、【対象の理解】184件(15.3%)、【学生の振り返り】108件(9.0%)、【健康増進センターの理解】68件(5.6%)、【健康診断の理解】31件(2.6%)、【疾患の理解】16件(1.4%)、【定義・理念】15件(1.1%)、【受診者の役割】6件(0.5%)であった。

カテゴリー毎のサブカテゴリーと具体的内容は下記の通りである。

【健康教育における看護師の役割】では、『指導的役割』『支援者としての役割』『自己研鑽』の3つに分類された。『指導的役割』では、「認めたうえで一緒に問題点と改善点を確認する」「共に具体的な改善策を考えている」などで448件あった。『支援者としての役割』では、「改善策を自己決定できるようにバックアップするように接する」「情報提供や健康意識を高めるための援助を継続して行うことが大切」などであった。『自己研鑽』では、「看護師の素早い必要情報の判断と観察によりの確な健康教育が可能」「教育を効果的に行うためには教育する側の看護師は幅広い知識が必要とされる」などであった。

【健康教育の理解】では、『健康教育の方法』『健康教育の意義』『健康教育と一次・二次予防の関係』『具体的教育内容』に分類された。『健康教育の方法』では、「教育内容は、意識・動機付け、実際の指導、二次検査の必要性の説明などである」「教育は問診によって行われ、日々の生活を聴取し本人に話をしてもらうことで日頃の生活態度を振り返ってもらうきっかけになる」などであった。『健康教育の意義』では、「教育の最終目標は、上からの知識の教育ではなく、健康生活の実

践をどうさせるかである」「教育とは、受診者の健康を本人の行動によって守ってもらうことを促すことである」などであった。『健康教育と一次・二次予防の関係』では、「健康教育は一次予防の手段の一つである」「健康診断での働きかけが一次・二次予防になる」などであった。『具体的教育内容』では、「栄養指導では、模型を使い分かりやすくイメージしやすいよう工夫していた」「アルコール・煙草等については、どうしてもやめられない場合は無理にやめるのではなく、少しずつ減らしていくなど受診者が実行可能な範囲で行えるよう考慮している」などであった。

【対象の理解】では、『受診者の持つ健康意識』『ライフステージから捉えた受診者』『受診者の特性』『受診者の心理的側面』に分類された。『受診者の持つ健康意識』では、「運動の必要性は理解されているが、十分に実施されていない」「受診者それぞれの個性から健康への意識も異なる」などであった。『ライフステージから捉えた受診者』では、「成人期は社会的責任も大きくストレスに満ちた生活環境下にある」「老年期にある方も多く他の疾患を抱えながらも受診する方もいる」などであった。『受診者の特性』では、「会社の健康診断や個人の受診者も多い」「16～80歳が対象となり健康な方もいれば疾患を持ちながら受診する方もいる」などであった。『受診者の心理的側面』では、「受診への複雑な思いがある」「結果説明は特に問題ないといわれても結果にはショックを受ける」などであった。

【学生の振り返り】では、『実習を通して感じたこと』『経験を通しての学び』『実習目標の自己評価』『今後の自己目標』『健康増進センター看護師への感想』に分類された。『実習を通して感じたこと』では、「自分と家族の健康を考える機会となった」「放置の理由は様々考えられるが、折角受けた健康診断なので再検査も受けてほしい」などであった。『経験を通しての学び』では、「健康に関する個人の意識は地域によっても異なることは地域看護学実習で学んだ」「対象に合わせ工夫した指導は病棟の看護師も退院指導で行っている」などであった。『実習目標の自己評価』では、「各検診での看護や健康教育の実際を

表4 「健康教育について」学んだ内容分析結果

番号	カテゴリー	サブカテゴリー	n=1203
1	健康教育における看護師の役割	①指導的役割	448(37.3%)
		②支援者としての役割	73(6.1%)
		③自己研鑽	41(3.4%)
		小計	562(46.8%)
2	健康教育の理解	①健康教育の方法	103(8.6%)
		②健康教育の意義	69(5.7%)
		③健康教育と一次・二次予防の関係	23(1.9%)
		④具体的教育内容	18(1.5%)
小計	213(17.7%)		
3	対象の理解	①受診者の持つ健康意識	91(7.6%)
		②ライフステージから捉えた受診者	59(4.8%)
		③受診者の特性	29(2.4%)
		④受診者の心理的側面	6(0.5%)
小計	184(15.3%)		
4	学生の振り返り	①実習を通して感じたこと	59(4.9%)
		②経験を通しての学び	23(1.9%)
		③実習目標の自己評価	12(1.1%)
		④今後の自己目標	10(0.8%)
		⑤健康増進センター看護師への感想	4(0.3%)
		小計	108(9.0%)
5	健康増進センターの理解	①健康増進センターの役割	22(1.8%)
		②他職種との役割	19(1.6%)
		③健康増進センターの実際	17(1.4%)
		④健康増進センターの目的と意義	10(0.8%)
小計	68(5.6%)		
6	健康診断の理解	①健康診断の実際	15(1.3%)
		②健康診断の目的	11(0.9%)
		③各検診の理解	5(0.4%)
		小計	31(2.6%)
7	疾患の理解	①生活習慣病	12(1.1%)
		②慢性疾患	4(0.3%)
		小計	16(1.4%)
8	定義・理念	①健康日本21	7(0.5%)
		②健康あきた21	4(0.3%)
		③WHOの健康・健康教育	4(0.3%)
		小計	15(1.1%)
		④健康日本21	4(0.3%)
9	受診者の役割	①自ら考えて決定すること	4(0.3%)
		②適切な指導を受けること	2(0.2%)
		小計	6(0.5%)

学ぶことができた」「健康増進センターの位置づけ、役割について理解することができた」などであった。『今後の自己目標』では、「健康増進センター実習での学びを今後の実習で活かしたい」「指導場面で、学びを参考に行いたい」などであった。『健康増進センター看護師への感想』では、「問診時の看護師のコミュニケーション技術の高さに大変驚いた」「看護師の話し方が印象的」などであった。

【健康増進センターの理解】は、『健康増進センターの役割』『他職種の役割』『健康増進センターの実際』『健康増進センターの目的と意義』の4つに分類された。『健康増進センターの役割』では、「全スタッフの密な連携が健康教育には必要」「医療者間での情報共有があつてこそ、受診者が安全安楽に受診でき、正確な受診結果を出すことができる」などであった。『他職種の役割』では、「多くの職種が関わっている」「栄養士や運動療法士による運動指導も行われている」などであった。『健康増進センターの実際』では、「主に問診時に健康教育が行われている」「問診時の関わりは病棟での指導のときとは違っている」などであった。『健康増進センターの目的と意義』では、「健康増進センターでは一次・二次予防を行っている」「健康の保持・増進が目的」などであった。

【健康診断の理解】は、『健康診断の実際』『健康診断の目的』『各検診の理解』に分類された。『健康診断の実際』では、「受診者自身が気付くような関わりが第一歩となる」「健康診断を受けることで本人が改善点を知ることになり健康意識が高まるきっかけになる」などであった。『健康診断の目的』では、「健康診断により受診者の一次・二次予防を行う」「健康診断での異常発見時は受診へつなげ早期発見早期治療への推進が重要」などであった。『各検診の理解』では、「乳房検診では自己検診を指導し、セルフケアを促す」「乳房検診では、自覚症状がなくても検診が必要であることが啓蒙されている」などであった。

【疾患の理解】は、『生活習慣病』『慢性疾患』に分類された。記述内容は、『生活習慣病』では、「代表的な生活習慣病は、生活習

慣の中の危険因子の繰り返しによって作られる」「生活習慣病は、生活習慣や環境因子が疾病の発生や経過に大きく影響している」などであった。『慢性疾患』では、「慢性疾患増悪予防には、生活習慣を改善することが重要である」などであった。

【定義・理念】では、『健康日本21』『健康あきた21』『WHOの健康・健康教育』に分類された。

【受診者の役割】では、『自ら考えて決定すること』『適切な指導を受けること』に分類された。『自ら考えて決定すること』では、「受診者自身が自ら考え話すことが大切である」などであった。『適切な指導を受けること』では、「受診して悪いところを探して終わりではなく、今後も健康保持・増進を継続するため適切な指導を受けることも大切」などであった。

Ⅶ. 考 察

1. 「看護の役割」についての学び

「看護の役割」では11カテゴリーが形成されたが、その中でも【健康診断時の援助】が28.3%、【健診センターにおける看護の役割】が15.2%と両者で43.5%を占めている。

【健康診断時の援助】の内容は、『精神面への配慮』の理解が15.8%を占め、羞恥心やプライバシーの保護・不安の軽減を図るなど受診者への心理的配慮の重要性に気付くことができています。また、『対象のアセスメント』では、受診者の当日の体調確認の必要性など安全確保のための対応も大切であると気付いている。『セルフケアへの支援』では、受診者と共に考える姿勢の重要性を学んでいる。これらの学びは、看護師の対象に合わせた対応や、病棟実習では機会の少なかった問診での様々な関わり方の場面を目の当たりに見学したことで、これまでの実習での自己の看護を振り返る機会となったこと、また、看護師が一つ一つの援助の意味付けを学生に投げ掛けながら指導してくれたことが、様々な援助について学生自身が考えるきっかけになったものと考えています。

【健康増進センターにおける看護の役割】では、健康増進センターは安全やサービスの提供、一次・二次予防の役割がより重要にな

ることについて理解できており、健康増進センターにおける看護の役割を捉えている。これらの学びは、これまでの病棟実習での慢性的健康障害や治療回復過程にある人々などの健康レベルにある対象と違い、健康障害の予防と健康の保持増進に向けた支援が必要な人々に接し、その取り組みへの看護師の関わりを見学することで、新たな看護の役割として認識できているものと考えられる。

【体制について】の理解は、『検診の介助』『他職種間の連携』『業務内容』に分類され、受診者への介助の実際や健康増進センターの連携の様子など業務面から捉えている。これらの学びは、円滑な受診のため各職種の役割が明確化され連携の必要性が高い健康増進センターにおいて様々な連携の実際場面を体験できたことや、病棟実習での学びから学生の気づきの視点が増えていることなどが要因として考えられる。

【健康教育における指導技術】は、『意識への働きかけ』『行動変容への支援』に分類され、健康保持増進と健康障害の予防にかかわる最も重要な看護の役割の一つを捉えることができている。学生のこれらの気づきには、一人の看護師を通して様々な対象に合わせた教育指導的役割の場面を直接見学したことが大きく影響していると考えられる。

【健康診断時の援助】【健康増進センターにおける看護の役割】【体制について】【健康教育における指導技術】の4つのカテゴリで全体の72.4%を占め、実習を通し各場面の見学ができたことから役割や特徴を理解することができたと考える。しかし、実習目標である「生活習慣病予防における看護の役割の理解」について考察を深めた記述は少ない。

その要因として、記録用紙の設定項目を<看護の役割>としたため役割の捉え方の焦点が定まりにくかったこと、また、実習の形態が見学実習であり受診者との直接的な関わりが少ないことが挙げられる。学生自身に社会生活や生活体験が少ないことから受診者の生活背景をイメージしにくく受診者を生活者として捉えられていないことが、それらを踏まえたうえで成り立つ健康増進センターの看護の役割の理解の深まりにつながらなかったものと考えられる。

少子高齢社会の現代において、「健康日本21」に代表されるような一次予防への取り組みは今後も重要視されるだろう。人生の中心を占める成人期にある人への看護を学ぶ成人看護学において、二次・三次予防だけではなく一次予防における看護について考えることは今後ますます重要となる。学生は「健康レベルに応じた実習によってそれぞれ特徴的な多くの学びを経験することができる」¹⁾のである。健康増進センター実習において捉えた役割を感じたまままで終わらせるのではなく、一次予防の場において看護者に求められている役割や果たすべき役割にまで学生自身が深く考えることができるような実習が今後は必要となると考える。

2. 「健康教育について」の学び

「健康教育について」の自由記述件数は1203件であり、9のカテゴリが形成された。最も多かった記述は【健康教育における看護師の役割】で562件(46.8%)であった。そこから3つに分類できた内容のうち【指導的役割】だけで448件(37.3%)を占めた。健康増進センターでは看護師の問診を中心に健康教育が展開され、学生はその問診の場に同席し、その実際を見学する。問診では、受診者の日常生活を中心に指導が行われる。問診時の看護師の関わりは対象の日常生活での健康意識に働きかけるものであり、病棟実習では直接的に見学できる機会は少ない。個人対象の教育は個人の理解度やニーズ・ライフスタイルを確認し、評価・修正を行い対象のペースに合わせて教育ができる²⁾が、健康増進センターの看護師は短時間の問診の中でそれを行っている。学生は、問診時の看護師の意識的で教育的な関わり方を感じ取り、その重要性を学びにつなげることができている。今までに体験がなく、目の前でなされている看護師の意識的な関わりを受け止め、役割に気付いているのは学生の素直な部分の表れであるともいえる。看護師の役割として看護師自身の『自己研鑽』の必要性にも気付いている学生もいたが41件・3.4%と少数であった。指導する側にも役割と責任があると気付くことができている学生へその学びを自己の看護観にまで深められるよう学びの統合への教員

の関わりが必要である。

【健康教育の理解】も213件(17.7%)の記述があり、『方法』『意義』『具体的教育内容』など健康教育そのものについての理解が深まり、【対象の理解】も196件(15.3%)の記述があり、受診者の『健康意識』や『特性』『心理的側面』までの記述ができています。これらについても問診を見学し、看護師と受診者との間で交わされる交流を身近で感じることができたことが、学生自身の健康教育そのものや受診者についての考えを深めることにつながっていると考えられる。

健康増進センター実習の実習目標である「生活習慣病の予防と健康教育を理解できる」について「対象」「看護師の役割」「健康教育の意義や方法」それぞれの理解はできているが、それらを関連させ思考し健康教育に対する看護観を深めた考察には至っていない。

今後の生活習慣病対策での健診事業の課題の一つに健診前後の指導体制があげられ、受診者が健診の内容と結果を十分理解し、自ら評価することで日ごろの生活習慣を見直すきっかけができるような保健担当者の働きかけが求められており³⁾、一次・二次予防において看護に求められている役割は大きい。これからの看護を担うことになる学生は健康教育における看護の役割を自己の看護観として持っていてほしいと考える。

学生の実習における記録について坏らは⁴⁾「記録を書くことが自分の中でノルマ化されてしまっているのである。言語化することが目的になってしまい、臨床実習で感じた実感が理論化に向かわず体験のままで終わってしまう。」と述べている。今回の学生の記録についても見たまま感じたままの実感がそのまま述べられていることが多く、理論化された考察を加えた記述には至っていない。学生の意識の中に「まず書くこと」が第一となってしまい、実習で感じ取り考えたことが学生の中で熟成されず自己の看護観にまで深められないままの記述となってしまっている。その要因として、1日の見学実習であることにより健康増進センター実習の取り組みへの意識が低いこと、受診者を生活者としての視点で捉えることができていないことや学生自身に生活体験も少ないことから健康的な生活につ

いてイメージしにくいことなどが考えられる。また記録用紙については、今回の分析の結果「看護の役割」としての記述件数は831件、「健康教育について」の【健康教育における看護師の役割】では562件の記述があり、健康増進センターでの看護の役割と健康教育時の看護師の役割について学ぶことができています。しかし、学生の中で両者の役割について未整理のままの記述となっていることも多い。思考段階を意識した設定項目になっていなかったことも、記述内容の焦点の絞りにくさにつながり、学びを考察にまで深めることができなかつた要因となつたと考えられる。

また、これらの様々な要因を予測しての教員の関わりが不十分であったことも学生の学びの統合の不足を補えず、考察にまで深める助けとならなかつたと考えられ、今後の課題といえる。

Ⅷ. 結 論

学生の健康増進センター実習における学びを明らかにすることを目的に実習記録内容の分析を行った結果、以下のことが明らかになった。

1. 学生は「対象の特徴」「看護師の役割」「健康教育の意義や方法」が理解できており、受診者の健康意識への働きかけや生活背景を意識した関わり的重要性を学ぶことができていた。
2. 記録内容は、見たまま感じたままの実感がそのまま述べられていることが多く、理論化された考察を加えた記述には至っていなかった。
3. 記録用紙の設定内容の吟味や、学生の実習の取り組みに対する意識への働きかけなどを含め今後の実習方法の検討の必要性が示唆された。

謝 辞

本研究を行うにあたり、快く協力して下さった学生の皆様と、健康増進センター実習にて熱意あるご指導・ご協力頂いたA病院健康増進センターの指導者・スタッフの皆様へ深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 逸見英枝, 松本幸子, 横川絹恵, 白神佐知子: 成人看護学実習における学生への学習効果～実習誌

括記録内容の分析を通して～，新見女子短期大学紀要，第19巻，p165，1998.

- 2) 廣瀬規代美，中西陽子，青山みどり，奥村亮子，二渡玉江：成人看護学実習における集団患者教育実習導入の試みとその評価，看護教育，第44巻5号，p120，2003.
- 3) (財)厚生統計協会：国民衛生の動向，第52巻9号，p146，2005.
- 4) 坏千代子（監修）：看護必携シリーズ23，看護教育の実践，p33，学研，1993.

参考文献

- 1) 石井郁子：「看護教育のあり方に関する検討会（第二次）」を終えて，看護教育，JUN，vol45，No6，p435-463，2004.
- 2) 上田幸子，横川絹恵，白神佐知子，逸見英枝，松本幸子：成人看護学慢性期実習における透析センター見学実習の意義，新見公立短期大学紀要，第20巻，p151-158，1999.
- 3) 氏家幸子（監修）：成人看護学A成人看護学原論，廣川書店，1997.
- 4) 志賀くに子，伊藤榮子：母性看護学実習における学習効果の検討～分娩見学レポートの分析～，日本赤十字秋田短期大学紀要，第5号，p79-87，2000.
- 5) 島村美穂子，鳴海喜代子，澁谷えり子，中澤容子，會田みゆき，中村織恵：看護学生の慢性疾患患者理解の傾向について（第1報）－腎センター実習における実習記録の分析から－，埼玉県立大短大部紀要，第1号，p37-45，1999.
- 6) 廣瀬規代美，中西陽子，青山みどり，奥村亮子，二渡玉江：成人看護学実習におけるグループによる集団患者教育の学び－学生のレポートによる評価の分析－，群馬県立医療短期大学紀要，第10巻，p41-48，2003.